

TOPICS

祝 2020年度秋季学位記授与式・卒業式

広報誌編集委員会

2 020年度の学位記授与式・卒業式新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐ観点から、2020年9月18日(金)に各研究科の代表者のみの参加により安田講堂で実施された。理学系研究科からは星野真弘研究科長と、理学系研究科総代として張庭宇(チャンティンウ)さん(物理学専攻修士)と張進(チャンジン)さん(天文学専攻博士)が式典に参加した。学位記授与式・卒業式の様子は、東京大学の

ウェブサイトインターネットによる同時配信があった。例年、理学系研究科主催の小柴ホールで開催されていた博士課程の学位記伝達式もこれにともない中止となった。

卒業・修了されたみなさんに心からお祝いを申し上げます。みなさんが今後、世界の学術研究の進展にいつそご貢献することを期待いたします。



理学系研究科総代の張庭宇さん(左)、張進さん(右)と当日の様子(下)写真撮影:尾関裕士

理学のワンダーランド in ホームカミングデイ2020

飯野 雄一 (副研究科長/広報室長/生物科学専攻 教授)

東 京大学では毎年秋に卒業生の皆さんにキャンパスを訪れていただく「ホームカミングデイ」を開催している。理学部では、卒業生にお子さんやお孫さんを連れて来ていただくほか、近隣の小学生などを対象に、未来を担う子供たちに理学の面白さを味わってもらおうと、講演会「理学のワンダーランド」を開催している。

2020年はコロナ禍の影響によりキャンパスでの開催は見送られ、ホームカミングデイとともに理学のワンダーランドをオンライン配信形式で10月17日(土)に開催した。

星野真弘研究科長の挨拶のあと、地球惑星科学専攻の諸田智克准教授が「はやぶさ2と小惑星

の話」を講演した。そろばんの珠型の形をした小惑星リュウグウに、はやぶさ2が接近して地表のサンプルを採取する様子を手に取るようにわかりやすく語った。次に生物科学専攻の土松隆志准教授から「花と進化の話」があった。花の形によって受粉を助ける昆虫の種類が異なることや、受精のしくみ、不適合性と進化の関係など、花に関する広範な楽しい話題を提供した。

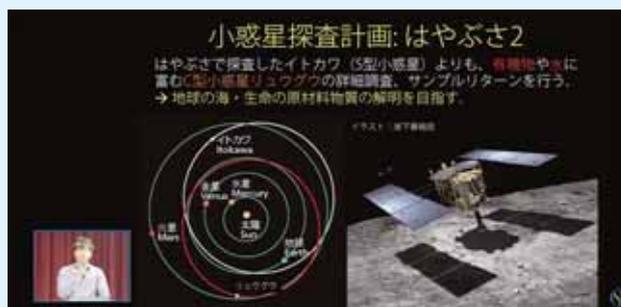
例年はホールの定員から100~150名ほどの入場であったが、今回はオンライン開催とした結果、延べ400人以上の方に理学部YouTubeチャンネルでの講演を聴講いただいた。また、配信中にSlidoを用いてリアルタイムでの質問を受けたところ、た

くさんの質問の中からいくつかを演者が答えるという双方向のコミュニケーションが取れたことで、子供たちにも楽しんでもらっている様子が伝わってきた。

本会が成功裏に終わりましたことを、聴講された方々および開催の準備をいただいた皆様に感謝申し上げます。



挨拶をする星野真弘研究科長(上)と、諸田智克准教授の講演の様子(左)、参加者からの質問に答える土松隆志准教授(下)



小林修教授が令和2年秋の紫綬褒章を受章

菅 裕明 (化学専攻 教授)

本 研究科化学専攻の小林修教授が、2020年11月3日の褒章発令において、学術・芸術・スポーツ分野で業績の著しい方を対象とする紫綬褒章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。

小林教授は、永年にわたって有機化学・有機合成化学の発展に尽力されてきました。地球環境との調和を志向したグリーン・サステナブルケミストリーの実現を目指し、医薬品や化成品等の生産過程で大量に排出される廃棄物を、有機合成化学の新手法によって大幅に削減するための研究を進めてこられました。主な研究としては有機溶媒に代わる反応媒体として水を用いる有機化学・有機合成反応の研究、リサイクル可能な不均一系触媒の開発、有機分子の基本骨格を効率よく構築するための新反応・新触

媒の開発、反応容器に原料を流通させ連続的に合成を行うフロー精密合成法の研究などが挙げられます。特にフロー精密合成法をわが国の将来を担う鍵技術として大きく発展させるべく、基礎研究の充実と産業界への橋渡し、世界で活躍できる次世代の人材を育成するための教育、啓蒙にご尽力されています。

小林教授の研究は、理学の理念に基づく基礎研究ですが、学术界のみならず産業界からも大きな注目を集めています。また、同教授は、国内はもとより国際的にも高い評価を受け、米国化学会賞、独フンボルト研究賞、ハミルトン賞などを受賞しています。今回の受章を契機に、益々の御活躍を祈念いたします。



小林 修 教授

物理学専攻 堀田凱樹名誉教授が文化功労者に

能瀬 聡直 (新領域創成科学研究科/物理学専攻兼担当 教授)

本 研究科(物理学専攻)名誉教授の堀田凱樹先生が2020年度の文化功労者に選ばれました。堀田先生は1963年に本学医学部をご卒業の後、同大学院、カリフォルニア工科大学研究員、本学医学部助手を経て、1972年に本学理学部講師に就任し、1973年に同助教教授に、1986年に同教授に昇任されました。1997年に本学をご退官後は、国立遺伝学研究所所長、情報・システム研究機構の初代機構長などの要職を歴任されました。

堀田先生は行動遺伝学、生物物理学、神経発生遺伝学等の分野において数多くの顕著なご業績を挙げられています。特に、モザイク解析という古典遺伝学の手法を用いて、動物行動を遺伝子と発生現象に結びつけ、さらに数理統計学的を応用して突然変異症状の診断と解析を行った一連のご研究は極めて独創的なもので、分子発生遺伝学立ち上げ時期の内外の研究者に大きな影響を与えました。一方、わが国においてショウジョウバエ、ゼブラフィッシュなどのモデ

ル生物を用いた分子遺伝学を普及するのに大学等の組織の枠を越えてご尽力され、分野の発展に大きく貢献されました。米国の専門誌「Journal of Neurogenetics」が特集号で先生のご退職を記念するなどご功績は国際的に評価されています。ご退職後も、国際高等研究所監事などとしてご活躍され、現在は井上科学振興財団理事長として財団の運営にご尽力されています。2年前の先生の傘寿のお祝いの会では「～生命科学の来し方、行く先～」というタイトルで講演をされ、また昨年度の本学医学部鉄門倶楽部総会では「ショウジョウバエは三回も翔ぶか」という講演をされるなど、いつもの含蓄深くかつユーモアたっぷりの語り口で参加者を鼓舞してくださいました。

先生はこれまで、日本遺伝学会木原賞、井上学術賞、武田医学賞など数多くの賞を受賞され、紫綬褒章、瑞宝中綬章も受章されています。このたびさらに、文化功労者として顕彰されたことは、まことに先生のご業績にふさわしく、心からお祝い申し上げます。



堀田 凱樹 名誉教授

理学の本棚

「FLORA 図鑑 植物の世界」

魅力的なカラー写真満載の大型本である。写真一つひとつが実にダイナミックで躍動感溢れている。それもそのはず、原著者はかのスミソニアン協会とキュー王立植物園。植物フィールド調査の世界的牙城が担当しているのだから当然だ。写真だけでたっぷり楽しめる。

しかもこれは植物の図鑑ではない。植物の世界の図鑑である。だから植物の基本的な用語説明や分類などは割と軽く済ませてあって、むしろ昆虫や鳥との関係、環境への適応、繁殖など、植物の生のあり方についていろいろな側面から紹介している。それに加えてコラム的に、芸術作品における植物のあり方も紹介しているのは、本書の特徴のひとつだろう。それこそ幼い子どもから大人まで、それぞれに楽しめる本となっている。

日本語版の作成にあたっては私が監訳を担当した。今では欧米の花弁、野菜、果物などは普通に日本でも出回って



いるため、本書で例示されている植物中、日本で馴染みのないものは少数で、日本語での呼称の割り当てにはほとんど困らなかった。ただ面白かったのは、日本でもそうなのだが、分類・野外生態系の研究者が生理的な話に言及すると、えてして勘違いから誤った解説がなされることがある。本書でもそういう間違いがいくつか見つかったため、日本語に訳すにあたってそれらは訂正させていただいた。したがって日本語版は、原著よりもさらに正確である。自信を持ってお勧めしたい。



スミソニアン協会・キュー王立植物園/監修 塚谷裕一/日本語版監修
「FLORA 図鑑 植物の世界」
東京書籍 (2019年出版)
ISBN 978-4-487-81257-8